

産業会社組織の中でのカサンドラ症候群、 組織の病理への産業カウンセラーとしての対応

上淵 真理江

クライアントが（本論文においてはクライアントの情報についての守秘義務を第一として、執筆をしている）、今までの援助者にカサンドラ症候群というのは夫婦間だけでしょ、と言われ、さらに自分が否定され、傷つくクライアントも多い。また、「リフレーミング」を変えましょうという「認知行動療法」だけでは、傷も深まり、「自責感」がクライアントに募るケースもある。組織内でたとえば「身体的暴力」を振るわれた場合、認知を変えて、とクライアントに伝えるのは、困難であるし、倫理的にすでに、暴力は問題である。

援助者が忙しさ、雇用の不安定さの中で、知識の取得時間も難しい場合や、場合によっては燃え尽きにより、「脱人格化」して働き続ける援助もコロナ下でみられる。看護、医療、福祉でも深刻であり、サポートが必要である。

「家族療法」で言われる IP は「会社組織という集団」のなかで位置づけるのであれば、マウント、身体的暴力の隠蔽、「破壊性が強い」メンバーに長期さらされることで、身体症状、抑うつ、自死などに至るケールも少なくない。クライアントの症状と他者の破壊的言動の因果関係がはっきりしないなどの場合は、隠蔽されたり、クライアント本人の脆弱さに起因される場合もある。自死により、なんとか逃れたり、自己表現をしても、関わる人たちは、クライアントの思いが永遠にわからないケースもある。「救われなさ」を感じやすいカサンドラ症候群では、「あれこれ試している」「あの手この手」の対応をしているクライアントに対して心からの「アフターメーション」を援助者は送り続けることも効果的である。長い間、病的な組織やカサンドラ症候群の中で過ごしていると、クライアントによっては、逃げる気力も失うほどになり、「学習性無力感」となり、何をしても電気ショックから逃れられない動物実験と同様、生命、人生を諦めていく。自責感だけがある場合は、いったん可能であれば環境を変え、自分の権利、価値を取り戻すことである。

「攻撃性」のあるメンバーが一人ではなく、「組織の健康度」が下がると、複数となり、ターゲットとなったクライアントには手が負えなくなる。それだけの刺激にさらされ続けると、いじめなどは多くあり、マスコミにも出さない会社組織もあるため、クライアントは出口がないと思ってしまう。カサンドラ症候群でのトラウマはストレスレベルも高く、いわゆる「ス

トレス刺激を流して」とは質が異なる場合もある。

しかるべき、専門家に相談したり、トラウマやかなり長期にわたる「複雑性 PTSD」であると、トラウマ治療として例えば「EMDR」治療など専門家による治療もすぐ導入できないレベルになる。一般の人には「解離」「転換」の症状などは、理解が難しいため、医療、心理など、しかるべき、治療とともに、「法律」的な相談など「癒し」だけではなく、「被害」として示していくクライアントもいる。

産業医や産業カウンセラーの場合は、組織によっては、情報をクライアントが出すことで守秘義務が守られず、組織の方針でクライアントの「処遇」をすることもあるので、「組織の健康度」によっては、「外部機関」に相談し、クライアント自身が自分を守っていく必要がある。

ただ、弱体化されたクライアントは、「判断能力」も普段より低下しているため、だれが「安全な援助者」かについて判断ができないことがある。一人援助者が信頼できたら、「援助ネットワーク」の作り方を援助してもらったほうがいい。

入院治療や「ストレス緩和病棟からの出勤」などで、思考、感情を休めるクライアントもいる。

クライアントによっては、生活空間、対人関係など「場」を変えて、とりあえず、思考、感情が変わることは多い。状況の何が危険であったかについてなど、環境への認識が「地と図の転換」になるクライアントもいる。

毎日、毎晩、同じ組織にいと、「思考は鈍麻」し「ある種の、所属組織への適応状態」にはなる。「経済的なこと」のため、様々な症状と付き合いながらお仕事をしているクライアントも少なくない。組織に対しての「健康度アセスメント」については「健康度が低い部署、会社」ほど、組織内では伝えないほうがいい場合がある。

長期に攻撃、破壊的言動にさらされていると、自責感はかなり強くなるクライアントも多い。

会社組織全体、メンバーの「問題」を「外在化」し、攻撃者の課題を絶対に「引き受けないこと」も必要である。「学習理論」の「強化」「弱体化」「消去」「無反応」は、病理的な環境に対しても効果的である。

クライアントにとっての、会社組織の攻撃者が「般化」や「メタ認知」が難しい場合にも、クライアントが攻撃されているからと自分のことで悩まないことも大事である。「組織の風通し」をよくして行けること、「様々な密室」での攻撃は命を奪うこともあるので、周囲は最初理解しにくくても、周囲の組織にも「健康的に困ってもらう」ことが大事である。

クライアントにとっての攻撃者は「怒り」「違和感」「劣等感」を抱えながら、マウントしてきたり、攻撃的になることが多いので、その感情も引き受けなくてもいいのである。これが「消去」である。「引き受けなくていいものを拒否する力」をつけていくことがクライ

エントには必要である。「満たされることがない攻撃者」に対してクライアントはおびえないことが大事である。攻撃しても繰り返しても、嗜癖のように満たされず、次の攻撃をしようとするからである。

しかし攻撃者によっては「領域固有性」が強すぎて他の場面でまた残酷なことを引き出す例もクライアントについては起こることがある。クライアントは、相手に対しては、攻撃反応への「消去」により、「この人にやつあたりしたり、辛さをぶちまけても、虚しい」となんとなく無意識に感じることができ、破壊性をクライアントに向けることが少なくなることもある。

クライアントにとっての攻撃者が会社組織に複数いて、一人ではできないために、グループなどで、クライアントに向かってくる場合も多い。「一人でやっていけない」という方たちに対しては、「協調性」ではなく、「弱くて徒党を組んで脅してる」だけである場合もあるので、「すごい、強い」など圧倒されるクライアントもいるが、その場を去って落ち着いてみれば大丈夫である。

また、会社企業内のより健康的な部署と分かち合うことで、「クライアントの、自分の守り方、組織の病理」など、理解をしてくれることもあるので、それで救われるクライアントさんもいる。

かなり辛くなるクライアントさんでも、カサンドラ症候群を自分の「全体」とせず、「一部」とし、イメージ療法を用いたり、また、ある程度「風通し」よくしたり、しかるべき処遇をしてもらうことで、「自分の境界」はさらに強くしなやかになるし、「集団の心理、病理」の理解も深まり、よりタフになるクライアントさんもいる。カウンセラーが「伴奏者」として、一緒に悩み、受け止めることで、クライアントさんの力も強くなっていくのだと思う。

ボーダーラインパーソナリティーディスオーダーの方、自己愛性パーソナリティーディスオーダーの方、解離性パーソナリティーディスオーダー（多重人格）の方たちなどのカウンセリングでは「共感」「受容」だけでなく、筆者の場合「方程式を解くような思考」という、「感情労働」だけでなく、囲碁、チェスのような次の一手、クライアントさんの出方など考えることもある。冷静にいろいろ思考する援助も、もちろんクライアントさんを守ることの要である。

会社組織に関するカウンセリングも、集団心理、同調圧力、隠蔽、虚偽、競争、蹴落とし、病的協調性、おどし、もふまえつつ一人の人間も全部は不健康ではないように、会社組織のより過ごしやすいく所にフォーカスする援助技法も工夫している。しかしかなりサイコパス性が強い社員とクライアントとの関係については、「いいところを探して付き合う」といっても、破壊力が強いいため、できるだけ遠のいて過ごす工夫が必要である。